

私は、南会津町立檜沢中学校の教頭時代に、新任の女性校長に仕えたことがある。この方はすばらしい方だった。一緒に仕事をさせていただいたが、「性差」というものを感じたことがなかった。もともと私に「男性だから」「女性だから」という意識があまりないせいもある。

少し古いデータになるが、教員年齢別男女構成比を見ると、平成28年度は、小学校が男性36.7%、女性が63.3%である。中学校が男性58.4%、女性が41.6%である。若い年代になると、中学校は半々ぐらいであるが、小学校は圧倒的に女性が多くなる。平成28年度と29年度の小学校初任者研修の名簿を見ると、男性は約1/3しかいない。小学校の職場は、女性が支えているといっても過言ではないのである。

以前、「京都市総合教育センター」の研究発表会に参加したことがある。中学国語の研究員の発表を聞いた。進行は女性、発表した研究員も女性、指導助言の京都市教育委員会の指導主事も女性であった。見た目、話しぶり、仕草、話す内容などから、それぞれ「できる」「優秀」という印象を受けた。昔のことを振り返ってみた。東京に出かけて研究公開に参加した。熱く語っている校長先生は女性であった。

女性の管理職が珍しいとは言わないが、まだまだ少ない現状にあっては、上記のようなことが印象に残ってしまうのだろうと思う。福島県の小学校の場合、63.3%が女性なのであるから、もっとも女性管理職が出てこないと不自然であろう。もちろん管理職となれば、男性よりもクリアすべき条件が多いことは認めざるを得ない。どんどん女性教員が多くなっても、今のままでは女性管理職の割合は上がっていかないであろう。働き方改革と同時に、女性が安心して力を発揮し、活躍できる環境をつくっていくことも必要だと考える。そうしないと、女性の割合が高い以上は、職場の「教員力」が上がらないということにもなる。すなわち、学校の「教育力」も上がらない。

女性教員が持てる力を発揮し、伸ばし、実績を積み上げていく中で、自然な形で管理職になる人材が育ってくるような環境にしていかなければと思う。学校には、男性教員も女性教員も必要だと考える。それぞれの持ち味「らしさ」がある。それを子どもの指導に生かすことが重要である。子どもたちも、男性の教員から学べること、女性の教員から学べると思う。様々なタイプの教員とふれ合いながら成長できることが、学校の魅力の一つでもある。

女性が働くということに関して、世の中はだいぶ変わってきた。女性にとって学校の教員という職業は、他の業種に比べて恵まれているほうだと言われている。教諭の段階では、男性も女性も関係なくそれぞれが力を発揮できる環境になってきていると思う。しかし、管理職となるとどうだろうか。男性も女性も関係なくとは、まだまだいかに感じている。女性が女性教員のことを考えるのは当たり前のことである。男性が女性教員のことを考えなければ状況は変わらない。

南会津町立檜沢中学校時代にお仕えした女性の校長先生は素敵な方であった。学校であるからいろいろなことが起きる。何が起きても感情を表には出さず、冷静に対処していく。自分の感情をコントロールできるという点がすばらしさの一つであった。もともとそういう方なのか、意識してそうなさっていたのかはわからない。当時、教頭であった私は、校長になって自分の教頭時代の至らなさに気づかされた。「申し訳なかった」という思いであった。今であれば、もう少しまともな教頭になれたと思う。何でも大事なことは後になってからわかるものである。月曜日の朝、よく校長室に呼ばれた。「教頭先生、朝ご飯食べてないでしょ」と言っていた「おにぎり」の味は忘れられない。